

パンダに恋をする

則武睦未

あなたは三十歳になったばかりですね。他人からはよく若く見られます。人並みにそれを嬉しく思うこともありますね。体のいいお世辞であろうと受け取ることも少なくはありません。鏡の中に映る自分の姿は年相応であろうと思うけれど、確信はない。「年相応」というのは、一体どういうものなのであろうかと考えを巡らせてみます。心に何が思い浮かぶでしょうか。はたして何も浮かびません。

あなたは洗面台の前に立って、いつものように自分を見ています。右手に歯ブラシを持ち、歯磨き粉をたらしたその先端を口の中に入れ、ぐいぐいと歯茎に沿って動かしています。ほんとうに、よく太っている。百五十五センチで体重は六十キロを超えている。太っているとおばさんっぽくなりやすいものです。でも、あなた自身は、今のところまだそういう気配はないような気がしていますね。ところであなたには、自分が「おばさんっぽく」なるのかそれとも「おじさんのように」な

るのかそれとも、もつと想像も出来ないものになるのか、判然としていません。さあ、どんなふうになっていくのが楽しみです。でもそれは、今はまだよくわからないことなのではないでしょうか。

年齢とともに、口の横を走っている溝は徐々に深くなってきたような気はするし声も徐々に低くなってはきた。しかし、まだ依然としてどこかに幼さが残っています。具体的にそれがどこなのかといえば、口元です。唇がほどよく肉厚なのだ。愛嬌、とまではいかないが、それはどこか年端のいかなさを感じさせる部分ではある。口の中に歯ブラシを入れて内部で動かしてゆくと、たつぷりと肉のついた頬がゆつくりと歯ブラシの位置に合わせて隆起をしたりへこんだりを繰り返します。奥歯を磨いてしまうと、イーと口を押し広げて前歯を出します。歯並びは決しているほうではありません。犬歯は文字通り犬のように尖っています。

「年相応かどうか」決めるためにはどうしたらいいのでしょうか。同い年の他人と比較すればいいのです。

初めに浮かんできた顔は、中学までの同級生のケロンパです。彼女は、主婦をしながら骨董屋を営んでいます。ケロンパは蛙が好きで蛙のグッズを集めていた（それは今も昔もかわらない）から周囲からそういう名前と呼ばれていました。そしてさらに、蛙に似た顔をしている。蛙に似ているといっても、決して醜い容貌をしているわけではなく、割と可愛い顔で奥二重の目尻の若干上がった目が印象的で人好きのする雰囲気がある人です。

ケロンパとはここ二年ほど会ってはいません。あなたは大学に入るときに地元を出てきて、それ以来ずっと東京近郊に住んでいます。自然とケロンパに会うのは年に一度か二度、地元に戻ったときだけになりました。二人とも基本的には個人主義者であり、過度にベタベタすることは嫌いだか

ら、地元と東京という距離は二人にとって心地良くもある。そしていつしか、ケロンパは結婚して、あなたも仕事が忙しく年に一度か二度しか地元には帰らなくなりましたから、今では年に一度会うのが精一杯という関係ですね。

中学時代は、部活も同じ美術部だったのでほぼ毎日一緒に帰る日々でした。

ケロンパの家は県道に面した骨董屋でした。店先にはずらつと観音像や七福神の像や茶の湯の竈、陶磁器などが並び、その畳十畳ほどの屋外陳列スペースの奥に骨董屋の店内へと通じる透明なドアがありました。勿論屋外陳列スペースには、雨をよけるための屋根はついており、店を閉めているときには屋根と地面との間にシャッターが下りる。そのシャッターの表面には赤茶けた文字で住吉美術店、と書かれています。ペンキはとどころはがれていました。店がなぜそのような名前なのか、あなたは知らなかった。住吉、というのはケロンパの名字でもなければ店のある場所の地名でもありません。でも、そんなことはどうだっていいのです。だれも興味がありません。

住吉美術店のシャッターのすぐ右横にはバラの花が植えられていました。当初は店先を美しく飾るためのものだったのかもしれないけれど、あなたが物心ついて前を通りかかる頃には既に野生ともいえる状態になっていました。誰も管理をしていない様子で葉がよく茂っていました。大きくなりすぎて、もはや美しいとは言えませんでした。バラについての記憶までが不意に蘇ったことを、あなたはとても不思議なことのように思っています。

二年会っていない間にケロンパはどのようにかわったのでしょうか。

ケロンパと最後に会ったのは一昨年冬の冬に帰省したときで、ケロンパは一歳になる男の子を連れていました。実家の骨董屋とはやや離れた場所にある、美術店所有の倉庫の二階に夫と子供と、家族三人で暮らしています。運送業をしている夫は不規則な勤務で家にいないことも多い。平日の昼

間には、彼女は子供の面倒を見ながら骨董屋の地道な作業に没頭しています。あのときあなたは、いつも道路に面したその店を入っていき、ぱっと見には人影の見あたらない店の奥に向かつてこんなには、と大声で言いました。すぐに聞き慣れた返事があって、息子を抱いたケロンパがひよいと姿を現しました。

幼なじみというのはしばらく会わなくても以前とかわりない関係が保てるものかもしれません。そのときは、ケロンパは友人の突然の来訪をごくごく普通のことのように喜び、二人は店の中央にある掘り炬燵に座って話を始めました。ケロンパの子供は一歳になるかならないかだったけれど、比較的大きな子でした。いや、巨大だとすら言えた。ケロンパに似て蛙の面影を宿していました。掘り炬燵の上にはかごに入った蜜柑がありました。

「言葉は、まだなのよ。女の子は早いようなのだけど、男の子だからかしらねえ。」

ケロンパは、ほら、目の前にいるあのおねーさん誰だかわかる？ と、彼女を指さしながら男の子に話しかけます。男の子は、その自然に見開かれた目で、不思議なものをでも見るかのように、まっすぐ前をじっと見つめる。あなたと男の子は自然に目と目が合い、彼女は笑って見たが男の子は笑わなかった。言葉と感覚とが、彼の中でどのように格闘をしているのか、ちよつと読み取るのが難しい無表情です。

「立つのは早かったの。まだあぶなっかしいけど、走れるの。結構速いのよ。」

ケロンパはそう言ったけれど、ぶよぶよとしたその子が速く走るのをあなたはうまく想像できません。

そのとき二人が一体どんな話をしたのか、今となっては、それ以上に細かいことは浮かんできませんが、二人きりではなくケロンパの子供を挟んでいたから、おそらくその話を中心だったのには

違いありません。

二人が話し始めて間もなくひとりの闖入者が現れました。ケロンパの父です。彼は、標準体型のケロンパと違って太っています。彼は、ケロンパよりはむしろ、赤の他人であるあなたと似ているといつてもいいかもしれない。もし仮に骨董屋に他の客がいて、その客に二人のうちどちらがより娘らしいかと訊ねたら、他人である彼女のほうを指すでしょう。事実ケロンパの父は、彼女のことを娘同様にかわいがつていた節もありました。ごくたまに会う彼は、あなたにとつて、実際の父とはいかないまでも、父親とはどういうものだろうか、という最低限の想像力をつなぎ止める役割を果たしていたようです。あなたの父親は十五歳のときにいなくなつてしまいましたから、それ以来あなたは、父親がいる生活というものをちゃんと想像することができなくなつています。

住吉美術店は一階が店舗、二階がケロンパの両親、および独身の兄の居住スペースという形をとっています。台所と風呂を含む一室だけは一階の店舗の奥にあり、そこは店舗のレジの向こうにある引き戸をガラガラと開けて出入りする仕様になっていました。その日二人が話しているとその引き戸が音を立てて開き、期せずしてケロンパの父が現れました。彼は、少し見ぬ間に髪がかなり白くなつていました。腎臓を悪くし透析に通つていふ話、あなたは以前ケロンパから聞いて知っています。

「元気かね。」

ケロンパの父は、目の前に現れるなり掘り炬燵で向かい合っている二人に話しかけてきました。ケロンパは、なぜかくすくすと笑います。

「坊主、結構大きくなつたからなあ。」

と、彼は大きな腹をひとゆすりして話します。彼の満月のような大きな顔の上に歯並びの悪い口

がぱっくりと開いていた。彼は少し離れた位置の椅子に腰を下ろしました。

「出産してから、すっかり痩せちゃって。」

と、彼はケロンパを指して言いました。言われてみればそうかもしれません。でも、あなたは自分が太っているせいか他人が少しばかり痩せても太っても、気がつかないことが多いのです。しかし、「すっかり痩せた」というのは言い過ぎではないでしょうか。ケロンパは、身長は百五十センチを少し超えたくらいだけれど、体重は四十五キロはあるように見えました。

「坊主、これは誰だ？ 誰だ？」

ケロンパの父は、座っている彼女を指して男の子に尋ねます。さっきのケロンパにそっくりな動作。顔は似ていなくとも、こういうところに同じ血が流れているという事実が現れるのか。男の子は、大きな目を一度閉じ、再びぱつと開くと、やはり無表情のままケロンパの膝の上でじっとしています。

「ようやくわかってるんだが、恥ずかしがっているなあ。」

と、微笑を浮かべながらケロンパの父は言います。それから彼は、高血圧についての話を何の脈絡もなく始めました。

「この人ね、困ったモノなのよ。」

父を遮って、ケロンパが言いました。

「三ヶ月ほど前だったかしら。果物を食べ過ぎたのよ。あなた知っているとと思うけど、昔から、うちの台所のテーブルの上には果物が山ほど置いてあったでしょう？ 最近はお母さんも気をつけて、果物を買わないようにしているようなのだけど、たまに自分で買ってきちゃうのよ。バナナ、スイカ、みかん、メロン……沢山ありすぎると見ているだけで気分が悪くなる。この人、一気にある

だけ食べてしまつて倒れて救急車で病院に運ばれたのよ。透析中だから、医者にも果物はあまり沢山食べないようにと言われていたの。でも、全く言うことをきかなくてね。」

ケロンパは笑いながら、しかし眉をひそめて言いました。不摂生な父の面倒は、ケロンパの母と主に家業を継いだケロンパが見ています。ケロンパには兄がいたけれど、兄はそのとき世界を放浪中で家にはいませんでした。彼は、不定期に家に戻ってきて、近くの工場でアルバイトを何ヶ月かやり、再び何らかの理由をつけて旅に出ます。旅行の動機のひとつに、「コロンビアのコーヒーを飲みに行く」というものがありました。また、アメリカ旅行をしていた際に、友人夫婦のペビーシッターをして過ごしていた時期もあるようでした。そんなふうには、ケロンパの兄は年のうち半分以上はどこか他の国を渡り歩いています。父が透析に行く際の送り迎えは殆どケロンパがしています。家業も、少しは兄も手伝うことがあるようだけれど、殆どケロンパの負担になっているようです。

「もう元気になったのだから、今更思い出さなくてもいいだろう。」
と、ケロンパの父はあっけらかんとした調子で言いました。昔から医者 of 言うことをきかずに不摂生を繰り返しているのが、その肥満した体型と、どこかゆるやかな動作を見ていると手にとるようにはわかりません。

「元気じゃあないじゃない。少なくとも健康的じゃあないわ。」

ケロンパが言うと、ケロンパの父はその細い目で数回瞬きをして、
「いちいち気に病んじやあいられないなあ。」

と言うとウハハハ、と笑い飛ばしました。血圧が高いと、なんとなく世界がぐらぐらと揺れるような気がする、と彼は付け加えます。こうして仕事をしていても、もう昔のようにはいかない。昔は少々の無理は平気だったが、今は少しきついことをすると、すぐにくらーつとくるんだ。本当に

くらくらーつとして、気がついたら床にはいつくばっていたこともある。血圧っていうのはなおらんものかな。透析をしたすぐ後はいいんだがすぐに上がってきて、頭がガンガンとすることもある。これ以上強い薬は出せないと言われ、医者は言うし、どうしたものかなあ。

「味の濃いものを食べ過ぎているのよ。」

ケロンパは、赤ん坊の手をとってあやしなげに言います。ケロンパが赤ん坊の手をいじると、赤ん坊はそれに反応してばたばたと手を動かしました。

「味の濃いモノじゃあないと、味なんてわかりやあしない。腎臓食、のようなものを病院で食べてみたことがあるがあれはひどいものだった。栄養士に、もっとおいしいものを作らないと食べてやらないと言っちゃった。」

小鼻をひくひくと動かしてケロンパの父は言いました。川嶋のイーサンという人がいただろう、おまえ、覚えているか？ と、彼がケロンパに訊ねると、ああ、ときたまお客で来ていた人ね、わたしはあんまりよく知らないけれど。と、ケロンパは興味なさそうに答えます。

ケロンパの反応などおかまいなしに彼は、第三者である客のあなたまでが「川嶋のイーサン」という人のことをよく知っているかのように話をはじめました。話を聞いていると、「川嶋のイーサン」の川嶋というのは名字ではなくて、地名であるらしい。あなたは、徐々にその地名についてうっすらと思ひ出しました。故郷であるその街の北の端には大きな川が流れていますが、川沿いにその地名がありました。

ケロンパの父の漫然とした話は続いていきます。

川嶋のイーサンは、もうそれはいい男で、五十くらいだったけれど女にはもてたよ。俺と違って細くて、背はまあまあ高くて、もともとどこから来たのかわからないようなヤクザまがいの、若い

頃は悪いことをさんざんした人だったがとにかくいい男だった。ちょっと前に病院の廊下で顔を合
わせたから何をやっていいのかと訊くと、糖尿病になったと言う。まあ俺もちょっと糖尿の気があ
るから、話があつてしばらく廊下で立ち話をしたよ。イーサンとは何年ぶりだったかなあ、八年く
らい、いや十年くらい経つていたかなあ。俺が何歳だときくと、五十三だと答える。俺はびつくり
したよ。そりゃあ、自分も年を取れば相手も同じように年をとるのは当たり前だ。でも、イー
サンはせいぜい四十前半にしか見えない。若いなあ、あんたと言ったら、そうでもないよすつかり
年をとつたよと照れていた。しかし、また新しい女がいるふうなことを話した。相変わらずこの男
は悪いことを続けているんだなと、内心思った。しかし糖尿というのとはかなわんね、最近どうも目
が見にくくなつたようだと、イーサンは言った。俺も透析になつちまつた、と話したらイーサンは
驚いていたよ。透析というのは、なんだ、その、ひどく面倒くさいらしいじゃないかと言つてい
たよ。そのイーサンが、だ、先月ぼつくりと逝ちまつた。もう本当に突然だった。なんでも、寝
ている間に心臓発作を起こして翌朝死んで見つかつたという話だった。顔も、それほど苦しんだ表
情はしていなかつたという話だった。その話を聞いたとき、イーサンらしい最期だと思つたなあ。
すばつとポツクリ。なんともうらやましい話だ。俺はまだまだ死にたくはないし、あの人がはやく
死んでしまつたのは散々これまで悪いことをしてきた報いのようなものだと思うが、ああいうふう
に短時間に、だからだと苦しむことなく死ぬのはいいことだと思つたよ。

父親が話している間、ケロンパは赤ん坊の手で遊ぶのに熱中していたから、自然と相づちを打つ
のは客である彼女の役割になります。父が話し終えたとき、ケロンパは彼女の目を見つめてわずかに
笑いました。

あなたは、ケロンパの顔を思い描こうとしています。少し離れた目、立ち気味の耳、昔から頬に散らばっていた雀斑、引っ込んでいる逆三角形の顎、薄い眉。でも、それは一体いつの顔なのでしょう。

最後に会ったときのことを考えると、あなたの中にあるケロンパの顔は二年前のものです。けれど、幼なじみだからか、思い出すのはむしろ二年前の顔ではなく小学生、中学生の頃の顔で、しかもケロンパはよく髪型を変えたから、記憶の中には、違う髪型の同じような顔が土偶のように並んでいます。

どうしてケロンパのことを急に思い出したのか、よくわかりませんでした。同い年の同期なら職場に何人かいるし、その人々と毎日会っている。その人たちのことを思っても不思議ではない。けれど、よくよく考えたら、ケロンパのことを思い出す伏線がないではありません。一週間ほど前、もうすぐ息子が二歳になること、自分たちは相変わらず元気でやっている旨を知らせるメールが携帯に入っていたのです。

それにしても、洗面台の前で、あなた自身の顔とにらめっこをはじめてから、何年が過ぎたのでしょうか。十代前半くらいの頃から、毎朝鏡を見ていました。でも、思いをはせることができるのはせいぜいここ十年くらいの間のことには過ぎません。案外何の感慨もないものです。ここ十年の間に、あなたの中で崩れていったものもあれば新たにできてきたものもあります。目立たぬけれど決定的な変化もないではない。十年の間に、性欲は、まるで海の奥深くで暮らし一生人の目に触れることのない深海魚のように心の奥底に潜っていききました。男女両性とも恋愛できる体質にたまたま生まれついていたせいで、男の恋人がいた時期もあれば女の恋人がいた時期もある。しかし、数年前に女の恋人と自然消滅してからというもの、特定の誰かと、何かをつくりあげたりこわしたりす

ることに対しておそれを抱くようになりました。誰かと出会っても、それは自分の中にうまくはいりこんで消化されてゆくことのない出会い、いわば不良債権のようなもの。ここ数年は、人々は男も女も、前を何気なく素通りしてゆくだけの存在です。

今のこの年齢を、小学生、あるいは中学生の頃に想像したことがあったでしょうか。たぶん、なかったのではないか。小学生だった頃に父親が、何かの折にふと、ノストラダムスの預言が当たって二十世紀の最後の年にだれもが死んでしまう、というようなことを言いました。父親は空調関係の技術者で、もともと不合理なことは信じないたちだったようだけれど、どうしてそんなことを言ったのでしょうか。あなたが十五歳になった頃、彼はふらりと家を出て行ったきり帰りませんでした。